

明治期における旧藩主家と旧藩士

内山, 一幸

<https://hdl.handle.net/2324/1441331>

出版情報：九州大学, 2013, 博士（比較社会文化）, 論文博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

氏 名 : 内山 一幸

論文題名 : 明治期における旧藩主家と旧藩士

区 分 : 乙

論 文 内 容 の 要 旨

本稿では、明治期における旧藩主家と旧藩士の関係を、旧柳河藩主立花家を事例として検討した。従来、この分野の研究は旧藩主家の当主である大名華族個人に着目して、政治史や経済史からアプローチする方法が主流であったが、本稿では大名華族を組織内に位置づけて、組織として旧藩主家がどのように活動したか、また同家と旧藩士との関係が明治期にどのように再編され、そこにいかなる歴史的な意義があるかを解明した。

本稿で設定された課題は以下の六つである。①旧藩主家の意思決定の仕組みを解明すると同時に、②旧藩主家家政の制度と組織の検討、③旧藩主家の財政状況と構造の解明を試みる。以上の課題はこれまで全く未解明であった旧藩主家の家政に関する基礎的な研究であると同時に、残りの課題を解明するための予備的な考察でもある。④旧藩領と東京で形成された旧藩士の結合がそれぞれどのような構造となっており、かつ両者がどう影響しあったのかも見据えながら検討する。⑤それぞれの旧藩士たちの結合のなかで旧藩主家と繋ぐ主体がどのような役割を果たしたかを解明し、⑥旧藩主家とそれぞれの旧藩士たちの集合体が地域の近代化においていかなる歴史的な意義を有していたかを明らかにする。

本稿の構成は以下の通りである。第一部の目的は、旧藩主家における意思決定の仕組みを検討することにある。具体的には意思決定の仕組みの変遷を明らかにし、その仕組みに携わる主体を個別に分析していく。

第一章では、旧藩主家の制度と組織について、明治政府によって定められた家令・家扶・家従という新たな制度が既存の慣行を有する旧藩主家内にどのように受容されたのか、またその職制がいかなるものであったか、そして家政の担い手の特徴について分析した。第二章では旧門閥家の位置づけを検討することで、藩主を頂点とする武士団が、明治前期においてどのような秩序に再編されたのか、またその変容の原因を解明した。第三章では、家憲の成立過程の分析を通じて旧藩主家の意思決定に携わる主体とその仕組みがどのように変容したかを明らかにし、家憲が作成された意義を明らかにした。第四章では、明治十年代において帝国議会の開設を控えた中で芽生えた華族としての新たな自己認識と、複雑な意思決定の仕組みの中に位置する旧藩主家の当主という立場との狭間で、大名華族がいかなる活動を行ったのかという問題を、同家の当主寛治の学問(農学)への傾倒とその実践の点から検討する。

第二部では旧藩主家の財政と地域経済の関係について考察する。

第五章では、旧藩主家の財政を理解するための基礎的な作業として、立花家の財政状況と複雑な財政構造の解明を行った。第六章では、家禄という十分な収入があったにもかかわらず旧藩主家財政はなぜ赤字となるのか、さらにその赤字はなぜ明治十年代という時期に解決されるのかという問題を、立花家における家政改革の分析から明らかにした。第七章では立花家の資産や為替制度が、

創業期における士族銀行の経営の安定化に果たした役割を解明した。また、あわせて特定の旧藩士層の役割についても検討した。

第三部では教育社会学の成果を踏まえつつ、立身出世の社会構造の成立に旧藩主家がどう関わっていたか、あるいはその逆にこの構造が同家にどのような影響を及ぼしたかを具体的に解明する。

第八章では、旧藩主家の東京邸が上京遊学生たちや明治政府内で活動する旧藩士たちの集う場所となっており、そのことが新たな上京遊学生たちを支援する仕組みを生み出したこと、それが郷党的社会集団としての〈藩閥〉を生み出したことを明らかにした。第九章では、明治二十年代の地域社会において頻出する私立尋常中学校をめぐる諸問題を検討することで、地域における主体間同士の調整ないし調停を旧藩主家がどのように行ったのかを解明し、旧藩主家の地域社会に対する影響力というものを構造的に捉えることを試みた。第十章では、旧藩主家と育英事業との関係を検討した。旧藩主家は旧藩領内の様々な事業に金銭的な支援を行うが、なかでも育英事業については長期にわたり多額の支援を行った理由について検討した。